

特集

30代 は面白い

中国では30歳を「而立」と呼ぶ。論語にも「三十にして立つ」とあり、基礎がしっかり出来て、独り立ちをする頃である。そこから40歳までの10年間をどう過ごすか。それによって人生は大きく変わっていくだろう。

先日、40歳になったばかりのサガン鳥栖・尹晶煥監督には、この10年を振り返り、30代の人々へメッセージをもらった。新しい事業に挑戦する佐賀青年会議所第58代理事長の荒尾彰さんには本業のことも含め、これまで取り組んだことを教えてもらった。武雄市の菓子店「デタ

ント」のオーナーパティシエ・相森真一さんには、洋菓子職人を目指した動機やポリシーを伺った。長崎・東大村で自給生活を目指し、馬やヤギと暮らすカフェオーナー・霜川剛さんには、新しい生活の在り方に取り組むきっかけについて聞いた。

まさに基礎が出来て、その上に何かを積み上げようとしている最中の人ばかり。すでに成功した人ではなく、これから挑む人だ。世代に関係なく、その姿に何かを感じてほしい。



サガン鳥栖 尹監督 コラム

祝 40歳

苦尽甘来 特別編

30代の過ごし方

先

ごろ40歳の誕生日を迎えた。選手たちからは例年通りの手荒い祝福を受けた。心はまだ30代前半のつもりだが現実にはなかなか難しい。選手の練習に加わる時には、年齢差を感じさせないよう努力をしているが、だんだんと体の老いを感じている。基礎体力はまだ大丈夫だが、太ももの裏の筋肉が落ち、下っ腹がひっこまなくなった。

30代を一言で振り返るのは難しい。選手生活の終わりと次のステップへの備え、そして新たな挑戦。今のところ、良い結果が出ているので、きちんとした準備が出来たといえるだろうが、それでも難しい時期もあった。一番、厳しかったのは30代中盤、現役引退の決断をした頃だった。その2、3年前から次の段階へのビジョンはあった。でも、いつ、どこで行うのか、その辺の整理はなされていなかった。

20代後半から少しずつ、プレーが変

目標に打ち込めば、必ず実りある

わってきて、30代になってからは怪我也多くなり、回復も遅くなる。どこで身を引くのか。選手自身で決めるのは難しい。もう少しピッチに立っていたい。サラリーが安くなっても続けたい。次のステップについての恐怖もある。非常に難しい判断だ。2007年にサガン鳥栖で現役を終えることになった。頭の整理には時間がかかったし、正直言うとう、もう少し選手としてチャレンジしたかったが、いま振り返ると結果的には良い決断だった。

引退後は3年間、サガン鳥栖というチームのすべての部分を順を追って見ることでできた。最初はテクニカルアドバイザーとしてユースやサッカースクールを巡回した。次にコーチとしてトップチームの指導法や各選手のことを学んだ。それぞれの立場で経験を重ね、チームのいろんな側面を見る事ができたのは、監督という仕事に取り組む上で非常に大きな糧となっている。

30代は一番大事な時期かもしれない。

10、20代は社会に出る土台づくりをして、30代は必死になって仕事に取り組む。結婚して家族をつくる人も多いだろう。いろんな分野で違う部分もあるだろうが、よく聞くのは若いとき苦労すると後で楽になる、ということ。少しでも若いときに仕事に打ち込む。そういうものが大きな幸福となって返ってくる。変化の激しい今の世の中で、どう仕事をしていくのか。一つの場所に凝り固まっているわけにもいかない。

いろんな分野にチャレンジする人も多いと思うが、目標を持って取り組むことが重要だ。人間は夢がないといけない。お金をたくさん稼ぐことでも良い。目標を持てば、一日一日により実りがあるだろう。

40代をどういう10年にしていくのか。30代で培った経験を糧にして、余裕を持って課題に取り組みたいと思っている。自分の持っているものをより輝かせることが出来るよう頑張っていきたい。

特集

30代は面白い

今後の
(社)佐賀青年会議所
主催の主なイベント

佐賀城フェス2013

担当：佐賀城フェス実行委員会

7月13日(土)、14日(日)佐賀城本丸歴史館において「佐賀城フェス2013」を開催。昨年、佐賀市内外から3,000人以上が訪れた「さが新グルメフェスタ」に、野外音楽フェスを融合させ、佐賀の新しい大イベントとしての一歩目を踏み出す。

1日目…7月13日(土)15:00～21:00
8組～12組ほどのアーティストによる野外音楽フェス(有料)出演アーティストについての情報は次号にて発表予定!!

2日目…14日(日)10:00～16:00
グルメフェスタ+ダンスコンテスト+地元アマチュアバンドによるステージイベント

市民参加型ミュージカル 「ハッピーバースデイ」

担当：美しい心づくり委員会

“150万人が泣いた”ベストセラー小説をもとにしたミュージカル。出演者を地元的一般市民からオーディションで募集し、プロの演技集団「フリーダム」の指導のもと、歌・ダンスなどのレッスン期間を経て、11月16日(土)・17日(日)に佐賀市民会館で公開される。→詳細はP13

公益社団法人 日本青年会議所 九州地区協議会 九州地区大会 2013佐賀大会

7月13日～15日

九州一円で活躍する青年会議所会員が一堂に会して友好を深め、事業の成果を発表し合う。佐賀での開催は実に37年ぶり。出迎える佐賀JCメンバーは、佐賀の魅力を九州中に発信すべく、ただいま鋭意準備中。



(社)佐賀青年会議所第58代理事長

荒尾 彰さん(40)

プロフィール
あらお・あきら 1973年佐賀市生まれ。「あらお花店」専務取締役。高校卒業後、京都のフローラルアーティストに5年間師事。23歳で実家の「あらお花店」に入社。日本生花商組合第一位など賞多数。2013年1月、佐賀青年会議所第58代理事長に就任。今年7月には日本青年会議所九州地区大会を37年ぶりに主管。新しい事業「佐賀城フェス」を立ち上げるなど、新しい風を佐賀に巻き起こしている。

佐賀 青年会議所第58代理事長の荒尾彰さん(40)は創業約100年の老舗「あらお花店」の4代目。現在、専務取締役として4店舗の運営に携わっている。中学高校とバンド活動に励んでいた荒尾さんが今の職業を意識したのは高校2年生の時だった。「父親と将来の話をした時に、長男なので家業を継がなくては、と思いました。小さい時から手伝いをしていました、それまで自分の仕事にしようとは思いませんでした」。

半年後に先生の直属スタッフになることができました。同期入社で「入門」できたのは自らアピールした荒尾さん1人だったという。フラワーデザインとは、花を中心に音楽や空間、ドレス、テーブルウェア、すべてを選んで提案する空間プロデューサー。先生はデパートや高級ブランドのディスプレイも担当していた。その仕事は華やかな現場が多いからこそ厳しかった。「仕事はほぼ徹夜。準備したものが翌日変更になるなど日常茶飯事。京都国際会議場であった結婚式関係の全国フェアでは1週間缶詰めでした。大変でしたが、出来たものは、やっぱり他の作品と比べて別次元でした」。

当初は3年の予定だった修業を2年間延長してもらった。最後には先生の書いた設計図をもとに実際の素材を選ぶ重要な仕事を担当した。「花を生けるためのベースには木材や金属などいろんな素材を使います。先生の話を聞いて素材感や光沢などテクスチャーをどう構築するかを考え準備していました。先生から学んだのは逃げない精神力。幅広く俯瞰的に見ることの大切さも学びました」。

23歳で帰郷。忙しい時間を工夫して、フラワーデザインの大会へ挑戦する。「仕事が終わってからコツコツ、自分の作品を作り続けました。全国大会クラスだと2カ月はかかりました。約10年間チャレンジしてきました。九州代表として全国大会に出場するなど高い評価を受けた。

32歳で佐賀青年会議所(JC)に入る。「唐津JCの方に勧められたのがきっかけです。同世代の人とのつながりを持ちたかったので」。新人時代は、先輩たちと話す機会は少なかった。「佐賀ブロック協議会の役員になって県内JCメンバーと面識ができた。、ステップアップすることでつながりが広がっていききました。実は同期が先に委員長に就任したんです。先を越されて悔しかった。健全な競争意識を持てるのも、この組織の良さですね」。

そして総務委員長に就任。「地道な裏方仕事です。議案を的確に集め、配布をきちんとする。いかに会議を効果的に短く運営するか。それをみんなに課す以上は、こちらも責任感を持って臨まなければいけません」。本業をこなしながらの多忙な日々。佐賀JCの持つっている力を使つて、それを活かして認めてもらうべく、音楽や歴史、物産などが一同に集結したイベントを目指す。「例えば音楽なら佐賀でも、ヒップホップやロック、ジャズなどいろんな分野で活発な活動が行われています。でも、ちよつと分野が違つています。お互いのやっていることは見えにくい。佐賀JCの持つっている力を使つて、それを活かして認めてもらうべく、音楽や歴史、物産などが一同に集結したイベントを目指す。『例えば音楽なら佐賀でも、ヒップホップやロック、ジャズなどいろんな分野で活発な活動が行われています。でも、ちよつと分野が違つています。お互いのやっていることは見えにくい。佐賀JCの持つっている力を使つて、それを活かして認めてもらうべく、音楽や歴史、物産などが一同に集結したイベントを目指す。』

道を切り開く積極姿勢で

佐賀JCは今年、大きなチャレンジに取り組む。7月には「公益社団法人日本青年会議所九州地区協議会九州地区大会」を37年ぶりに佐賀市で開催する。その期間に合わせ「佐賀城フェス」を実施。徳育事業の一環として、佐賀市民がみんなで作る「ミュージカル」を上演する。九州地区大会誘致は3年越しで取り組んできた。「私自身、九州地区協議会役員と年、20年後の町づくりのために必要なのに出向したり、いろんな佐賀JCメンバークミットしてきました。歴代理事長

武

雄市街のちょっと外れ。長崎自動車道・武雄インターから車を走らせると、JR佐世保線の無人駅・高橋駅を通り過ぎ、最初の信号から右に曲がったら、土壁が印象的な「菓子職人の小屋 デタント」が現れる。日曜日の午後3時を過ぎるとケーキケースの生菓子が無くなってしまいう人気店。オーナーパティシエの相森真一さん(33)は「お客さんに申し訳ない気持ちです。無理して作ると、スタッフに負担をかけて、結局、品質が保てなくなるのが心配なんです」と語る。

きっかけはテレビ番組

「高校3年生のときに『テレビ

ビードが違う。東京よりも価格が安いので、たくさん作らなければいけません。またお客さん一人ひとりと距離感も大分の方がより密接に感じました。勉強になることが多かったです」。

実家の小屋を改装

2008年、実家の小屋を改装し「デタント」オープン。国道からちょっと入った、あまり目立たない場所。「現実的に他の選択肢はありませんでした。人通りが多いのが良いとは限りませんが、自身、ゴミゴミした場所はまだ好きではありません。いろんな方から、今は場所じゃないよ、と助言されました。自分も、不便な山

それに応える

菓子職人の小屋デタント
オーナーパティシエ

相森真一さん(33)

無料テラスで売上アップ

2011年12月、店の前にテラスを作った。「きっかけはケーキを食べる場所があれば嬉しい、というお客さんの声でした。店内のベンチで窮屈そうに食べる方もいらっしやいました」。コーヒーなどを無料で提供した上、新しいスペースでは今のところ、何も販売していません。「素敵な空間でケーキを楽しみながらおしゃべりしたら、おしゃべりな感じになるんじゃないかと思って。設備投資をどう回収するかを考えるとやっぱり、面白そうだからぱっとやっちゃう。深く考えるほど難しくなるので」。

冬場のオープンだったため利用するお客さんは少なかったが、徐々に増え始め、今では地元の小学生の憩いの場になっていくという。「売上も前年比1.3倍くらいになって、結果的には大成功でした。ドライブの途中でも生菓子が食べられるから、県外ナンバーのお客さんも増えた気がします。お客さんが何を望んでいるか。それをやれば結果はついてきます。遠回りのように近道ということがありますね」。

ブログ、ツイッター、そしてフェイスブック。SNSを使った発信も、お客さんと直に接したい、との思いからだ。「ツイッターで、商品が焼きあがりました、と投稿

プロフィール
あいもり・しんいち 1980年武雄市朝日町生まれ。杵島商業高校から大阪あべの・辻製菓専門学校へ進学。フランスでの研修を経て卒業後、東京の「パティスリー オキ」で働く。大分の洋菓子店勤務の後、2008年、実家の小屋を改装し「菓子職人の小屋 デタント」オープン。佐賀県内だけでなく、県外にも熱心なファンが多い。またフェイスブックを楽しみながら活用。こまめな情報発信でお客さんの声を商品に活かしている。

チャンピオン全国ケーキ職人選手権」を見て、それまで女性の世界だと思っていた洋菓子業界に男性もいるんだと気づきました。ちょうど皿洗いのバイトをしていて、白いコック服に憧れていたこともあり決めました。パン屋さんとかちがいいか悩みましたが、パン屋さんには朝早いので、こっちの道に進みました。小さいとき母と一緒に菓子作りを楽しんでいた記憶があるのでも昔から好きだったと思います」。

高校卒業後、大阪あべの・辻製菓専門学校へ進む。基本的な技術を学び、同校のカリキュラムに従いフランスで半年間を過ごす。帰国後、専門学校を卒業し、東京の洋菓子店に就職する。場所柄、芸能人のお客さんも多い華やかな職場。「製造スタッフが足りていたので、最初は接客からスタートしました。その後、厨房に入り、雑用や粉ふるいから始まって、6年かけ、いろんなポジションを一通り担当しました」。続いて大分のお店に転職する。「最初から、いつかは地元でお店を出そうと考えていた。佐賀が大好きなんです。そのためには都会だけでなく、地方での仕事を知っていた方が良く、考え、大分を選びました。同じ洋菓子作りだが、お店が違えば考え方も異なる。「ある程度はやる自信があったんですが、とにかく

価格が他店よりちょっと高め。材料は東京時代に使っていたものが中心なので、コストとしてはギリギリです。東京よりも家賃が安いので、味は都会と地方の中間くらいです」。

「材料は東京時代に使っていたものが中心なので、コストとしてはギリギリです。東京よりも家賃が安いので、味は都会と地方の中間くらいです」。

菓子職人の小屋 デタント

住所／佐賀県武雄市朝日町
大字甘久 1444-2
TEL／0954-23-3035



プロフィール
しもかわ・つよし 1978年長崎市生まれ。長崎北高卒業後、アパレル販売員を経て、23歳でアジア放浪。帰国後は自給生活を目指し準備をすすめる。2004年大村市に土地を購入。06年「納屋のカフェ WARANAYA」オープン。自ら栽培した小麦でピザやパスタを提供している。絶滅危惧種の対州馬や山羊、犬、猫たちとの共生は、料理の鉄人の仕掛け人・小山薫堂さんなど、全国の感度の高い人々から注目されている。

自家

納屋のカフェ WARANAYA
霜川 剛さん(34)

特集
30代は面白い



納屋のカフェ
WARANAYA

住所／長崎県大村市東大村
1丁目1880-72
TEL／0957-50-2276

絶

滅危惧種となった対州馬と一緒に耕した畑で小麦を育て、石釜で焼いてピザやパンにして食べる。ゆったりとした放牧場ではお母さんやギが5つ子ちゃん面倒をみている。大きなメタセコイヤの木陰では子どもと犬と一緒に昼寝している。そんな「楽園」のような場所が長崎・東大村の山中にある。納屋のカフェ・ワラナヤ。オーナーの霜川剛さん(34)は時間と手間をかけ理想の生活の場を作ろうと奮闘している。

アジア放浪が転機

霜川さんは高校卒業後、アパレル販売員になる。「音楽など、いろんな情報に触れることができて非常に刺激的でした。でも最初から、大学に進学した場合と同じ4年間で次のステップに行く決めていました」。

後輩も入社し指導的なポジションを任せられるようになり、自分の時間が少なくなっていくように感じ出した3年目。霜川さんは23歳で仕事を辞める。「海外へ行きたい」。資金を貯めるために、愛知県の自動車工場で期間工として働く。勤務時間はバラバラ。単調な作業に心身ともにすり減らしながら、6カ月間の勤務を終えた。「最初はアラスカに行こうと思っていましたが、航空券が高かったので予算的に厳

製小麦が育てる「平和」

しい。そこで目的の地を台湾の故宮博物院に変更。ずっと中国の歴史に興味がありました」。台湾から始まった放浪の旅は、アジア各国を巡り、ネパールまで2、3カ月間続いた。工場の単調な日々から、エネルギー溢れるアジアの日常へ。この旅で出会った人々や、そこでの生活の現実は霜川さんの人生を大きく動かし、いく。「ネパールの道路は穴だらけ。アスファルトを燃料として使うために住民が掘っていると聞きました。紛争のため立ち入りが難しい場所もありました。「平和」は決して当たり前のものではない。食糧やエネルギーを日常的に奪い合う。日本では見えなかった現実が、気づかされました。「平和」に暮らすためにどうしたら良いのか。まずは自分たちの生活をきちんと組み立てないといけない。「食糧を自分たちでどこまでできるか。まずはそれを考えるようになりまし

生活のための農業

帰国後、農業関係の仕事に従事しながら次のステップを模索する。2004年、大村に3000坪の土地を購入。雑木林に手を入れ、小麦畑を耕す。「最初は農業だけで生活をするつもりでしたが、商品作物を作って生計を立てるのは難しい。この場で生きるた

めに、現金収入を得る手段として、自家製農作物を使ったカフェを作ることにしました」。敷地内にあったボロボロの納屋を自分たちで2カ月半かけて改装した。「夏の作業は本当に過酷。元々大工仕事は好きだったんですが、作業がしんどくて、金づちを持つと手が震えるくらいトラウマになりました」と笑う。購入から2年後、「納屋のカフェ ワラナヤ」としてオープンした。

から、料理の鉄人の仕掛け人・小山薫堂さんなど、感度の高い人々の心を捉える。「学びの時間」もそういう提案のひとつだ。「自分たちが面白いと思った、第一線で活躍するプロダクトデザイナーや建築家、作家などを呼び、ここで話をしてみよう。お客さんと講師両方にとって、平和と生活を考えてきつかけになってほしいと思います」。長崎県内だけでなく、九州一円から訪れるお客さんも多い。

対州馬とヤギと働く

数年前には、現在、純血種としては30頭しか残っていない貴重な馬・対州馬のサトコもやってきた。対州馬は長崎市内では数年前まで自動車を運ぶために重宝されていた。「愛玩動物ではなく、一緒に仕事を仲間で。鋤を曳いて畑を耕したり野良仕事を手伝ってくれます。ヤギも雑草を食べたり、ミルクを分けてくれたり。一緒に生活する一員です」。

「平和」は政治やイデオロギーで作られるものではない。一人ひとりが足元から築いていかななくては得ることができない。あらゆるものがブラックボックス化し、自分たちの生活の実像が捉えにくい現在、自分たちの出来ることを少しずつ積み重ねながら、外部に極力頼らない生活を模索する霜川さんのチャレンジは大きな共感を生んでいる。